

▲画像1 「ムギ」表紙  
河目悌二画（昭和21年）

そして終戦。翌一九四六（昭和二十一年）年八月に『キンダーブック』は復刊される。その特集タイトルは「ムギ」（画像1）。一九二七年の創刊号が「お米の巻」でありながら、表紙の図柄がミレーの（麦の）「落穂ひろい」を模したものであったことがふと思ひ出される。この時、岸辺福雄や和田実と並んで倉橋惣三は「賛助員」であり、編輯顧問ではなかった（倉橋が岸辺と編輯顧問を務めるのは、その次の第一輯第二編（一九二八年）から）。

浜口順子（はまぐちじゆんこ）  
お茶の水女子大学大学院教授。本誌編集主幹。

子ども学探訪

編輯顧問  
倉橋惣三  
と  
キンダーブック  
12

敗戦後復刊されたキンダーブック

浜口順子

（大学教員）

新しいキンダーブック

太平洋戦争勃発の前後から出版界は厳しく統制され、『キンダーブック』は一九四二（昭和十七）年四月に『ミクニノコドモ』と改題された。編集体制は、石原玉吉、西崎大三郎率いる二組にリードされることとなったが、前号で触れたように、一九三七（昭和十二）年ごろになると、倉橋ら編輯顧問の影響は有名無実化していた。

復刊号の編集主任は丸山長治（倉橋はその後も亡くなる直前まで毎号何かしらの寄稿をし、一九五一年の第六集第一編から一九五五年七月発行の第十集第七号までは「顧問」としての巻末寄稿を続けた）。記念すべき復刊第一号の最初のページを飾るのは、倉橋の次の文章であった（画像2）。

## 新しいもの

### — キンダーブックの再刊 —

倉橋惣三

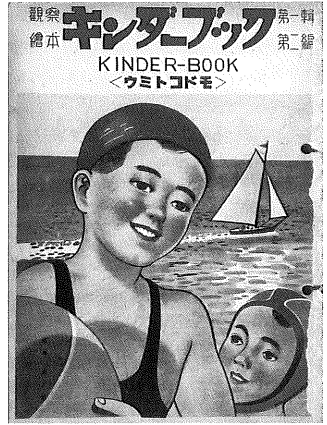
散った後に、落ちた後に、古い根から新芽がふく。新しい種子に、前とは別な花と実が待たれる。その更生の気は勇ましく、生長の力は逞しい。今や初夏の自然がそれであり、立ち上る国の勢がそれだ。その大きい勢に推されて、幼い子らの園に蘇るキンダー・ブックの再刊も亦、その一つである。

まへからの親しみをつづけても頂きたいし、これからの新らしみを期待しても頂きたいし。新しいものによつてこそ、子らを新らしくし、国を新らしくしてゆけるのであるから。

栽えようく。培はうく。幼い子らの園に。



▲画像2 「ムギ」から — 新しいもの — (昭和21年)



▲画像3 「ウミトコドモ」表紙  
高井貞二画（昭和21年）

### 編輯後記

キンダーブック再刊、と唯一度新聞紙上に広告した  
だけなのに、営業部の机の上には朝夕どっしりと重い  
郵便の束がとどけられました。その郵便物の束を見る  
たびに私は目に見えない全国愛読者の方々の本誌に対  
する熱烈なるご期待に唖に熱いものを感じるのでした。

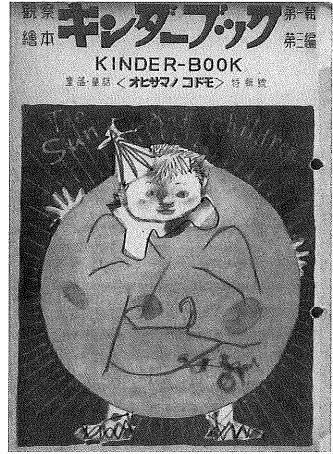
「良いものを作らなければ、日本の明日を担う幼児  
達の為に」こうつぶやきながら編輯員は暑い日中を東  
奔西走しました。（中略）紙にインキに資材難の折で  
すが、第三編童謡童話特輯号「オヒサマノコドモ」よ  
りはもっともっと良い紙を使用して印刷いたします。

（丸山長治）

紙のみならず社会全体の物資が枯渇している状況の中で  
「幼児のための絵本」が復刊されることの意味。印刷の悪さ、  
ページ数の少なさがいつそう、そこにある制作者の希望と  
責任感を強く伝えていいる。復刊の反響は、丸山長治の復刊  
第二号「ウミトコドモ」（画像3）の文に見える（画像4）。



▲画像4 「ウミトコドモ」－編集後記－



▲画像5 「オヒサマノコドモ」表紙

輯者は何と申し上げてよいやら（後略）」と記した。

その濱田先生とは、濱田廣介のことである。「ムラノコ」という文を寄せている（画像6）。

ムラノコ ムラノコ ドコニ イタ  
 カワノ イグサノ カゲニ イタ  
 ハダカデ ハダシデ ナニシテタ  
 キヨウモ ヒナカノ ザコスクイ  
 カワノ ナガレノ キノエダデ  
 アミノ ヤブレガ マタ フェタ  
 ザコザコ ニゲロ アミノアナ  
 コドモ トレトレ ソノサカナ

その第三編「オヒサマノコドモ」は、手に取ってみて、それほど紙質の向上を感じさせるものではなく、ページ数も依然九ページだが、文と画のかき手の強い意志が伝わる（画像5）。丸山は編集後記に、「この編では、現代児童文学界の代表的な諸先生方にご執筆を頂きました。短い締切期間にも拘らず疎開先より、早々と、原稿をお送り頂いた濱田先生はじめ、諸先生諸画家さん方のご尽力に対しまして、編



画像6 「オヒサマノコドモ」から ムラノコー



▲画像7 「ようちえん」表紙

### 幼稚園への夢が見える

一九四七（昭和二十二）年四月発行の第二集第一編「ようちえん」特集（画像7〜15）。この号から、国民学校に合わせ、ひらがな表記となる。占領下GHQの民間情報教育局指導のもとに、この翌年の三月「保育要領―幼児保育の手引き」が発表されるが、当時はまだ大正十五年制定の「幼稚園令施行

規則」が発効している。したがって、「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」が保育項目である。この「ようちえん」編はすべて倉橋惣三が文を書いた。当時の庶民の生活を想像すると、幼稚園の中にこれほどの「豊かさ」は回復していなかったと考えられる。ようやく戦争から解放され、今こそ幼稚園の目指すべき姿を描き、読者と共有したいという願いが表れているような気がする。

最初は画像8の「あかるい おにわ げんきな こども おはよう」が始まる。園庭でわらわらと遊び回る子どもたち、傍でかわる先生の姿が描かれている。画像9では「じぶんでかながえる みんなとそうだんする きをつけてきる くふうしてつくる」とあり、自分の好きなことに探究的に取り組む子どもの姿が描かれ、現代に移してもまったく違和感のない情景である。

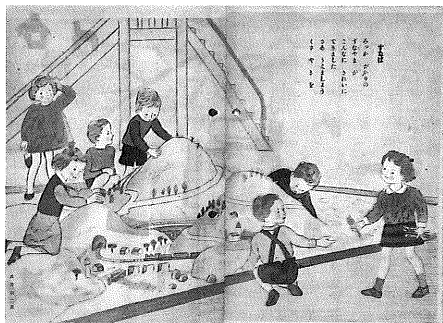
— 終わり —



▲画像12 「ようちえん」から — 遊戯 —



▲画像8 「ようちえん」から — 朝の幼稚園 —



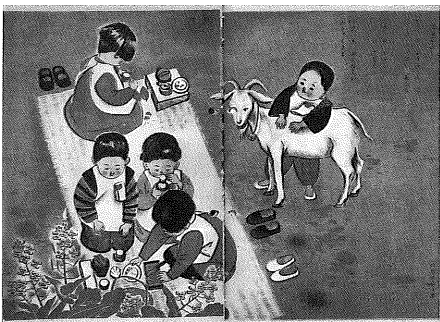
▲画像13 「ようちえん」から — 砂場 —



▲画像9 「ようちえん」から — 手技・積木・図画 —



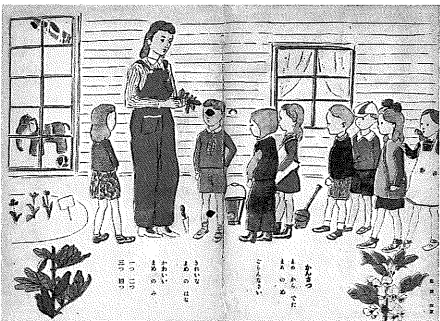
▲画像14 「ようちえん」から — お話(3匹のこぶた) —



▲画像10 「ようちえん」から — ままごと —



▲画像15 「ようちえん」 — 編集後記 —



▲画像11 「ようちえん」から — 観察 —